茨城再発見

『茨女』編集長

川井 真裕美（かわい まゆみ）

茨城再発見では、知っているけど、もっと詳しく知りたいことをご紹介します。今回は、「茨城県出身の女性」＝「茨女（いばじょ）」を応援するメディア、その名も「茨女」。二〇一三年からFacebookやホームページのインターネット上、そしてフリーペーパーで「茨女」を発信する編集長で、県人会の会員でもある川井真裕美さんに、活動を始めたきっかけや茨城への思いを伺いました。

PROFILE
水戸市出身。株式会社MIITO CREATIVE（ミートクリエイティブ）代表取締役社長。グラフィックデザイナー／イラストレーター。フリーマガジン「茨女」代表 兼 編集長。「茨城×女性×デザイン」という領域で、「よくばりな働き方を叶える！」ことを実践している。

―「茨女」を始めたきっかけはなんですか。

高校卒業後、大学生の頃から出身地の水戸を出て東京に住んでいましたが、まもなく祖母の介護が必要になりました。共働きで忙しい両親が疲弊していく様子を見て、私自身がお婆ちゃん子だったということもあり、介護を助けたいと初めてUターンを考えました。その時に地元の企業や、大人になってからの茨城での暮らしがあまりイメージできず、それを自分の耳で聞いて調べる作業を始めたところが、スタートです。転職活動を皆さんにシェアしたような感じになるのかもしれないです。その時にはすでに私も社会人として企業で働いていたのですが、地元にUターンするにしても仕事の条件だけでなく、都内と茨城では交通手段や家賃とか生活スタイル、遊びに行く場所が違うと思うので、そういった仕事以外の暮らしの部分も重要視していました。また、その当時は二十五、六歳で、これから女性として結婚、出産、子育てなどライフステージが変わった時に、茨城だったらどんな風に過ごせるのかなというイメージが少しでもつかめればと思いました。そこで、そうしたことの参考になるように、著名人や有料雑誌、テレビに取り上げられるような有名な方だとちょっと遠い存在に感じてしまうので、より身近なロールモデルになるような等身大の女性を探して記事にまとめました。

―コロナ禍での活動で考えたことや感じたことは。

二〇二〇年九月下旬に発行した十二号で、観光業などまさに人の行き来がストップしてしまうと深刻な影響を受けるような職業の皆さんと座談会をやらせていただきました。コロナウイルス感染症にまつわるニュースを見ているとどうしても毎日鬱々としてしまいますが、逆に取材を通して、大変な状況におかれている皆さんの前向きさに勇気づけられました。「何か自分でスキルアップできないか」とか、SNSで発信するなど、今できることは何かということを考えていることが分かりました。そして、こういう状況から解放された時にお客さんに来てもらえるよう一生懸命考えて、工夫して、そして動いているということに元気や勇気をいただきました。

―取材を通して感じる茨城の良さはどんなところですか。

ありきたりなのですが、あったかい。話始めると壁を作らずお話ししてくださる方が多いなと思います。茨城の女性は一見おしとやかで謙虚で、お話しを始める前は澄ましている印象がありますが、お話しを伺っていくと、本当は芯に強いものを持っていて、目標があって、粘り強い熱い思いを持っている女性が多いなと誰を取材していても感じます。

―これからはどういった活動をしていきたいですか。

茨女では次の号を最後に、編集長を交代しようと思っています。発行人としてはもうしばらくやらせていただきますが、コンセプトを決めたり、内容を編集していくところは今副編集長をやっている二人を中心にやっていくことになります。彼女たちは私がちょうど茨女を始めた時の年齢。それより若い編集部員もいるので、最近会議をしていても、私と見ている視点や、テーマ設定の上でも世代の違いを微妙な部分で感じるようになりました。茨女の取材対象は二十代半ば～三十代半ば、配布のターゲットは高校生から三十代半ばとしていますので、自分が茨女をつくった時のコンセプトや世代の感覚で編集部が内容もつくっていった方が茨女というメディアのためにも、読者のためにも視線を合わせられるのかなと思いまして…引退です！

―川井さん自身はこれからどういった活動をしていくのですか。

特に何か新しいことを始めるわけではなく、茨女はコツコツ一生のライフワークにしたいと思っています。今引退してすぐにやりたいのはホームページのブラッシュアップです。あとは今茨城県のアンテナショップでPRマネージャーをやっていることもあり、県産品のパッケージや販路、売り方のアイディアが蓄えられてきているので、県産品や観光でもっと外部に販売できるように何かできないかなと、ふわっとですが思っています。やっぱり皆さんアイディアやエネルギーはあっても、一個一個の点がつながって何か生み出すところまでたどり着くのが難しかったりするのかなとか、本当に近い人たちで盛り上がって終わってしまっていたり、でも実はそれを皆でシェアしたら面白いんじゃないかなと思うものが結構ある。「茨女」で培った編集力を、今度は本業のデザインにも＋αで活かして、「稼げる茨城」じゃないですが、その点を線にして、面にして、さらに広げていくみたいなことを、本当の意味で茨城の魅力を外部の人に発信していくきっかけづくりができたらいいなと思っています。

【facebook】https://m.facebook.com/ibajyo/　【HP】http://www.ibajyo.com/
フリーペーパー「茨女」の定期購読やバックナンバーの郵送も受け付けております。興味のある方は、HPをご覧ください。

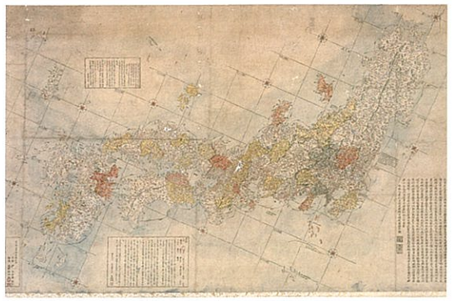
いばらきの先人たち

長久保赤水（ながくぼ せきすい）

高萩市

初の本格的な日本地図を制作した学者

いばらきの先人たちでは、郷土の発展に大きく貢献したり、全国的に活躍した江戸時代以降の本県ゆかりの人物について、その功績や生き方を分かりやすくご紹介します。今回は、令和二年九月三十日付で関連資料六百九十三点が国の重要文化財に指定された高萩市出身の地理学者　長久保赤水です。



「改正日本輿地路程全図」（高萩市歴史民俗資料館蔵）

長久保赤水は、多賀郡赤浜村〔高萩市〕で代々庄屋〈村長〉を務める旧家に生まれました。幼くして母親と父親を続けて亡くしましたが、継母が深い愛情を注いで赤水を育ててくれました。幼い頃から勉強が好きで、近所の海岸で砂に文字を書いて練習していたほどだったといいます。親戚や村の人から「農業をするのに学問はいらない。農民は農業だけやっていればいいんだ。」という反対の声もありましたが、継母は「人は、本来の仕事のほかに、楽しんで習うものがあると豊かな人生が過すごせますよ。」と言って、いつも赤水をかばったといわれています。赤水が学問を熱心に続け、農業と両立させていけたのは、やさしい継母の教えが身についていたからなのでしょう。

赤水は、はじめ、下手綱村〔高萩市〕の医者であり漢学者でもあった鈴木玄淳の私塾で学び、後に水戸藩の学者であった名越南渓に入門し、儒学・歴史・文学・漢詩などを勉強しました。

熱心に学問に取り組んだ赤水は、学問を通じて様々な人たちとの交流を深めていきました。なかでも松岡地方〔日立市・高萩市・北茨城市周辺〕において、師の鈴木玄淳を中心にむすびついた七人の友、いわゆる「松岡七友」との交流は赤水にとってかけがえのないものでした。

赤水は、見聞を広めるため、農作業が楽になる時期を利用して旅にも出かけました。

赤水は、旅で見聞きしたこと、調べたことを記録に残しており、奥州・北陸地方の旅行をまとめた『東奥紀行』や、安南国〔ベトナム〕から帰国した磯原村の漂流民を、磯原村庄屋代理として、長崎に迎えにいったときのことをまとめた『長崎行役日記』など、後に著作として刊行されたものもありました。特にこの長崎訪問は、赤水にとって大いに見聞を広げ、知識を得ることができた旅であったようです。

明和五年（一七六八）、これまでの学問の功を認められ、水戸藩の郷士（農村に住みながら、武士と同じ身分を与えられた者）に取り立てられましたが、その後もそれまで以上に学問に励み、農政や地理学などに関する多くの本を著しています。中でも、安永八年に完成し、翌年大坂（大阪）で出版された「改正日本輿地路程全図」は、日本で初めて経緯線の入った刊行日本図として有名です。全国各地の地理に関する書物や地図を集めたり、時には街道を行き来する旅人から話を聞いたりして情報を集め、二十年以上かけて完成させました。「自分が学んだ知識を世の人のために役立てたい。」という赤水の思いが込められたこの地図は、その願いの通り長く人々に愛用され、明治四年（一八七一）にいたるまで約百年にもわたり出版され続けたのです。

（高萩市歴史民俗資料館蔵）

赤水は、安永六年（一七七七）、六十一歳の時、水戸藩第六代藩主徳川治保の侍講〈直接勉強を教える役目〉に選ばれ、小石川の江戸藩邸に住むようになりました。赤水は農民の苦しい生活の実情を明らかにした『農民疾苦』を著すなど、農政学者の立場から、農民のための政治のあり方を藩主治保に説き続けました。農業と学問を両立させてきた赤水だからこそ、治保からもたいへん信頼され、その考えは大いに藩政に取り入れられたのです。地理学者、そして農政学者として多くの業績を残した赤水は、享和元年（一八〇一）、郷里の赤浜村で八十五歳の生涯を閉じました。

【略歴】享保2年(1717)－享和元年(1801)。多賀郡赤浜村〔高萩市〕生まれ。本名は玄珠。農業のかたわら学問に精進し、享保15年(1730)頃、下手綱村〔高萩市〕の郷医鈴木玄淳に学び、さらに寛保元年(1741)、水戸藩の学者、名越南渓に師事する。明和5年(1768)に学問の功により、水戸藩の郷士格に取り立てられる。日本で初めて経緯線の入った刊行日本図「改正日本輿地路程全図」を作成（安永8年完成。翌年大坂で出版。）。安永6年(1777)には水戸藩第6代藩主徳川治保の侍講となり、江戸常勤の身となる。『農民疾苦』を著して治保に農民の実情を進言するなど、農民の立場から藩政のあり方を考えることに努める。

※「いばらき文化情報ネット いばらきの先人たち」より一部転載